

令和6年度 大学教育再生戦略推進費  
 高度医療人材養成拠点形成事業  
 (高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援)  
 申請書

代表校名	金沢大学	
連携校名	金沢医科大学	
事業名	金沢学術アカデミーによる「基礎研究を理解し国際臨床研究を推進できる臨床研究医」の養成と医師の働き方改革の実現	
申請タイプ	○	【タイプA】 臨床・基礎融合研究基盤人材養成拠点
※タイプA、タイプBのいずれかを選択 ※タイプBの場合は本事業で主に対象とする診療領域を記入		【タイプB】 特色臨床研究基盤人材養成拠点
		主に対象とする診療領域 (複数可)
事業協力機関 (連携校を除く)	なし	

## 事業の構想等

### <事業の概要>

本事業は、「金沢学術アカデミー」を創設し、人が循環する持続可能な研究指導体制・研究環境を構築、「基礎研究を理解し国際臨床研究を推進できる臨床研究医の養成と研究者の研究時間確保による医師の働き方改革の実現」を目指す好循環を生み出す事業である。

医学生・大学院生に対し、初歩から高度な実験技術まで一元的に指導し研究力向上と研究指導の効率化を図る。育った人材はアカデミー内での後進学生の技術指導等を担う。さらに基礎系・臨床系研究室での横断的な配置により実験・研究補助に携わり研究技術の研鑽を積みながら最先端研究に触れる機会をもつ。

アカデミー教員等は学内の実験・研究を受託し、最先端の研究知識を獲得しながら研究指導に還元するとともに研究医の研究時間を創り出す。

研究医は確保された時間により、臨床実習を充実させ、本学が有する研究支援基盤を含めた研究リソースを十分に活用し国際的な臨床研究を推進する。

### <臨床研究等に関する実績>

本学は、世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）でナノプローブ生命科学の確立を目指すナノ生命科学研究所を擁する。細胞内のナノ動態を直接観察、分析、操作できるナノ内視鏡技術を開発し、様々な生命現象のナノレベルでの根本的理解を目指している。当該研究所はWPI採択から6年で656報の国際論文を発表し、うち114報（17.4%）がTop10%論文となっている。また、「がん、生活習慣病、脳神経病、微小粒子に起因する疾患、ナノ材料に起因する疾患」の5つにターゲットを絞り、ナノレベルでの理解・制御による革新的予防・診断・治療法の創出を担う人材育成の卓越大学院プログラム（令和元～7年度）を実施している。情報科学と医工融合による異分野横断型研究者育成を行う科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシブ創設事業（令和3～9年度）も実施中である。

さらに、全国の国立大学附置研究所で唯一がん研究に特化したがん進展制御研究所（Top10%論文15.3%）や、基礎橋渡し研究や文理融合・地域支援を行っている子どものこころの発達研究センター、人文社会・医学生物・数理化学系の融合により人類進化を解明するサピエンス進化医学研究センター、AI画像解析やバイオメディカルDXを推進するAIホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センター、能登志賀町コホート研究を推進し金沢大学WHO慢性肝炎肝癌協力センターとも連携した先進予防医学研究センターを整備し、基礎・臨床研究を推進している。本学の医学系関連全体においては、最近の5年間ではTop10%論文481件（12.0%）であり、特に免疫アレルギー、脳神経、がん、心血管系、代謝領域において、世界の研究をけん引している。

※過去3年間で公開した医学分野の学術機関リポジトリの登録数を以下に記入してください。

（令和5年度について集計が完了していない場合、令和2～4年度の欄に数値を入力し、令和5年度の欄は「-」を入力ください。）

学術機関リポジトリデータベース：https://irdb.nii.ac.jp/

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	計
基礎医学	—	—	—	—	—
臨床医学	—	—	—	—	—
計	121	143	121	137	522

※臨床研究を支援する組織が既にある場合は以下に記入してください（令和5年5月1日時点）。

組織名称	先端医療開発センター	
専任職員	人数	37人
	職種	センター長 1人、副センター長 1人、各部門長 2人、CRC 20人、データマネージャー 5人、生物統計家 2人、モニター 2人、技術補佐員 2人、事務補佐員 2人
兼任職員	人数	4人
	職種	各部門長 3人、CRC 1人
支援件数 （令和4年度実績）	31件（うち基礎医学分野の研究 4件）	

※組織以外で臨床研究を支援するための取組がある場合は以下に記入してください（令和5年5月1日時点）。

・各診療科にローカルスタディマネージャー（LSM）を配置し、診療科内での臨床研究計画作成についての初歩的なチェックや研究管理を行うなど、各研究者と先端医療開発センターとの橋渡し役となっている。  
 ・臨床研究法を遵守する臨床研究の実施に際し、研究奨励金を交付し、研究責任医師の負担を軽減している。  
 ・質の高い臨床研究等の実施を推進することを目的とした研究助成金を公募により支給している。

※バイオバンクを有している場合は以下に記入してください。

名称	設置時期	試料種別	保存試料数	疾患名
心筋症バイオバンク	H26年度	組織、DNA	約600検体	心筋症
脳腫瘍バイオバンク	H22年度	組織、血液	約500検体	脳腫瘍
原発性脂質異常症バイオバンク	S62年度	血液（血漿、血清）DNA	約7,000検体	原発性脂質異常症
腎生検組織バイオバンク	S55年頃	パラフィンブロック等 保存血清等	約27,000検体 約33,000検体	腎臓、リウマチ膠原病

## 1. 事業の構想

## (1) 国際レベルの臨床研究の推進、(2) 予算の活用計画

## ＜国際レベルの臨床研究推進の方策＞

金沢大学医学系は、AIホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センターやサピエンス進化医学研究センター、さらに先進予防医学研究センターや子どものこころの発達研究センター、WPIのナノ生命科学研究所、がん進展制御研究所とも連携することにより、金沢大学医学系の強みを生かした特徴のある研究を推進してきた。その結果、免疫アレルギー、脳神経系や代謝系などにおいて世界に先駆けた多くの研究成果を挙げてきている。この高水準の研究環境で多くの若手研究者が研究を行うことができれば、従来以上に世界をリードする国際レベルの臨床研究が可能となる。

そこで本事業では、高水準の研究能力を身につけた医学系若手研究者の養成を行うことを目的とした金沢学術アカデミーを設立する。専任の研究技術トレーニング教員、技術職員を雇用し、医学系若手研究者の育成を行う。さらにトレーニングを受けた若手研究者を人材バンクに登録し、基礎系および臨床系の研究室とのマッチングを実施することにより、効率よく研究成果を挙げるための至適な人材配置を行う。この結果、金沢大学医学系の強みをさらに発展させることが可能となる。また学術アカデミーの卒業生を、次世代の研究技術トレーニング教員として雇用することにより、持続可能で発展性のある学術アカデミーが実現できる。また、学術アカデミーで研究技術トレーニングを行うことにより、これまで各研究室で行っていた若手研究者に対する研究技術指導が軽減されることから、研究指導者の研究時間の増加につながり、全診療領域においてさらなる国際レベルの臨床研究が推進される。

## ＜推進体制及び予算の活用計画＞

本事業で創設する金沢学術アカデミーの組織体制として、センター長と2名の副センター長（基礎研究分野担当、臨床研究分野担当）を配置し、実働部門として「トレーニング部門」「人材バンク部門」「教材開発部門」の3部門を置く。学生指導を担う「トレーニング部門」には、新規で専任教員2名、技術職員2名を配置する。また、トレーニング部門は附属病院の臨床研究支援部門である金沢大学先端医療開発センターや、全学的研究支援組織の先端科学・社会共創推進機構、実証研究を支援する未来知実証センターと連携し、研究分野における研究補助の受託業務も担う体制を整備する。人材バンク管理、TA・RA等のマッチング、広報等を担う「人材バンク部門」には、専任教員1名、事務職員2名を配置する。教材・デジタルコンテンツ開発、カリキュラム作成等教学マネジメントを行う「教材開発部門」には、専任教員1名、事務職員1名を配置する。各部門にはそれぞれ部門長を置き、さらに3部門を総括的にマネジメントする部門統括長を置く。連携校である金沢医科大学においては金沢学術アカデミー金沢医科大学支部長を配置するとともにトレーニング部門における教員を雇用し、金沢医科大学、金沢大学双方で指導をできる体制とする。

上記の体制で、平成24年から実施している医学生で研究を推進するプログラムであるMedical Research Training (MRT) プログラム登録参加医学生、研究医コース医学生、大学院生をすべて金沢学術アカデミーに登録し、人材バンクを通して後輩指導や研究推進に寄与する。R6年度のTAは80名、RAは36名、SAは8名でスタートする。さらに、最終年に向かってTAは90名、RAは60名、SAは12名とする方針である。

## (3) 人材養成

金沢大学附属病院は、「未来の医療の継続的提供」を担うとともに地域に愛され世界で輝くことを目指し、研究志向臨床医の育成、研究の推進・奨励、魅力的な学びの場により「人が集い、人が育ち、人に貢献する」未来構想を掲げている。

未来構想の実現に向け、本事業では、基礎研究を理解し国際臨床研究を推進できる臨床研究医を養成するため、金沢学術アカデミーを創設する。

これまで各研究室において指導教員のもと個別に行われていた、研究者として自立するために必要な基礎的能力（実験、研究、論文作成等の技術）の指導を、アカデミーで一元的に行うことにより、高水準の教育研究環境を担保し、抜本的な若手研究者の研究力の底上げを図る。

アカデミーには、トレーニング専任教員及び技術職員を配置し、研究技術トレーニング、データ解析、図の作成、論文作成writing、英文校正等の指導を行う。学生のやる気・能力に応じて学士課程から卒後臨床研修、大学院博士課程へとシームレスに受講でき、育った学生が後進の学生へTA・RA・SAとして指導に携わる屋根瓦方式の体制とする。

アカデミー所属学生の個別データは人材バンクに登録され、修得した技術・能力に応じて医学系の基礎・臨床系の研究室をはじめ、理工系・人文社会系等の他の研究室ともマッチングし、TA・RAとして教育・研究補助を行うことで、実際の教育研究現場に参画し、技術を高めるとともに他分野の研究に携わることで融合研究意識を醸成する。

またアカデミーの教員・技術職員は、研究分野からの実験・研究受託を受ける。また、最先端の研究に触れる機会を得て、アカデミーでの研究・技術指導において還元する。

大学院課程では基本的に全ての学生にアカデミー所属を推奨する。学士課程では、従来から本学医学類で基礎医学研究者の開拓を目的に開設しているMRTプログラムの受講学生を想定している。MRTプログラムは、これまで基礎医学分野の研究室を主としていたが、裾野を広げ、基礎・臨床の交流を深めるため、多くの臨床研究分野へ拡大する。

アカデミーにおいて、学士課程から研究への意識付けを行い、卒前・卒後のシームレスな教育環境を整備するとともに、学内で世界水準の研究力を持つナノ生命科学研究所・がん進展制御研究所、連携校である金沢医科大学、学外の製薬メーカー・医療機器メーカーの研究所等と連携したインターンシップ実施、研究医の多様なキャリアアップの提示等により、臨床研究医の増加へと繋げる。

また、金沢医科大学と連携することにより、それぞれの研究面での強みを組み合わせ、幅広い先端的な研究領域の教育が可能となる。さらに、金沢医科大学の学生も金沢学術アカデミーに参加することを可能とし、本学以外にも研究指導や共同研究の門戸を開き、臨床研究医養成のモデルケースとなる。

## (4) 達成目標・アウトプット・アウトカム (評価指標)

## (達成目標)

高度な研究力を備えた医師の継続的・安定的な養成が医学教育において社会的に強く求められている。本学では、基礎研究を理解し国際臨床研究を推進できる臨床研究医を養成するため、金沢学術アカデミーを創設する。アカデミー所属の医学生が体系的なカリキュラムによる学修を通じて基礎的なレベルから高度なレベルまでの医学的知識と研究技術を修得する。本学の基礎研究領域・臨床研究領域の連携と、学術アカデミーによる丁寧なマッチングにより、横断的に複数の研究に参画する機会を提供する。基礎・臨床双方で研究を推進できる人材を継続的・安定的に育成できる体制を確立する。同時に、自ら研究を推進し、実験補助も可能な医学生を研究室に配置できるようにすることで研究医の負担軽減を図り、研究力強化と働き方改革実現の両立を実現する。大都市ではない北陸で学術アカデミーを成功させることで、大学病院を拠点とする研究医養成の好循環モデルを確立し、広く全国に提供できるモデルケースとする。

## (アウトプットと評価指標)

(必須指標：◆、任意指標：◇)

- ◆研究環境の充実 (教育的配慮の下教員の研究活動に参加する学生の増加等)
  - 【目標】金沢学術アカデミー所属学生数 令和6年度 620名程度 →令和11年度 700名程度
- ◆臨床研究環境の充実 (教育的配慮の下教員の臨床研究活動に参加するTA、RA、SAの増加等)
  - 【実績】令和5年度 TA 70名、RA 12名、SA 0名
  - 【目標】令和6年度 TA 80名、RA 36名、SA 8名 令和11年度 TA 90名、RA 60名、SA 12名
- ◇MRTプログラム参加研究室向けFD開催数 年2回
- ◇基礎研究室配属 (4年次) の充実
  - 海外派遣実習、インターンシップ

## (アウトカムと評価指標)

(必須指標：◆、任意指標：◇)

- ◆臨床研究論文数の増加 【実績】令和4年度：823 【目標】令和8年度：850 令和11年度900
- ◇国際共著論文数の増加 (%) 【実績】令和4年度：20.7% 【目標】令和8年度：25% 令和11年度：30%
- ◇Top10%論文数の増加 (%) 【実績】過去5年平均12.0% 【目標】令和8年度：13% 令和11年度：14%
- ◆研究支援者を配置する研究室・診療科等の医師の教育研究時間の維持・増加
  - 病院で診療にあたる教員の研究・教育に係るエフォートの割合
  - 【実績】令和5年度35.1% (研究28.7%, 教育6.4%) 【目標】令和8年度 37.6% 令和11年度 40.1%
- ◆医学系大学院生数の増加
  - 【実績】令和5年度大学院新生197名
  - 【目標】令和8年度大学院新生210名 令和11年度大学院生新生239名 (定員)
- ◇臨床実習症例報告におけるガイドライン、レビュー、RCT文献の引用率の増加
- ◇MRTプログラム修了認定者 (卒業時) 数の増加
  - 【実績】令和5年度MRT学生4名 【目標】令和8年度8名 令和11年度15名
- ◇MRTプログラム研究業績 (論文・発表) 数の増加 【実績】令和5年度6 【目標】令和8年度15 令和11年度20

## (5) 診療参加型臨床実習の充実に関すること

## ①課題・対応策

本学は令和元年から72週間の診療参加型臨床実習実施体制に移行した。主な診療科は1チーム4週間とし、本学附属病院と北陸3県を中心とした42の関連病院で学生教育に当たっている。特に総合診療・地域医療臨床実習では、1施設に1名の学生配置とし、基本宿泊を伴う形で4週間の実習を行っている。また、令和4年から卒前学生医用オンライン臨床教育評価システム (CC-EPOC) を採用し、経験症候数や医行為数のデータを学生、指導医双方に適宜公表し、実施率の改善に活用している。今後さらに主な症候と医行為を安全にかつ確実に経験し、卒業時に必要なEPAを達成することを目指していく上で以下のような課題がある。

## ①連携持続のため医学類と教育提携医療機関の負担軽減が必要

遠方の医療機関への移動交通手段や宿泊の確保、そして、受け入れ医療機関の指導医との事前準備と緊密な連携が必要であるが、現在の教員体制には限界がある。

## ②臨床実習生 (医学) により経験症候数、医行為経験数、実習の質が不均一

CC-EPOCの効果的な運用のためには、事前準備、学生医・指導医双方への指導・入力支援、リアルタイムのモニタリング体制、時期を得たフィードバックが必須であるが、現在の教員体制では限界がある。

## ③侵襲的医行為や羞恥心を伴う医行為の実施率が低い

侵襲的医行為等の実施にあたってはシミュレーター等を活用して段階的経験が必要であり、物品やシミュレーターの整備を進めてきたが、増大する物品・設備や利用予約の管理に負担が生じてきている。

上記①～③の課題を解決すると同時に、臨床実習指導者・教員の教育や研究のための十分な時間確保、負担軽減のための働き方改革を推進するため、以下の取組を実施する。

## ①臨床実習の教育支援者1名と教育提携医療機関・地域医療実習調整担当1名

教育提携医療機関を直接訪問してのFD研修やヒアリングを実施し、大学との調整、シミュレータの手配等を通して、医行為の経験率の向上と指導医、教職員の負担軽減が期待できる。

## ②e-ポートフォリオ/シミュレーションセンター担当1名

症候・医行為実施率のモニタリングとフィードバックを迅速に行うことが可能になる。実臨床での経験が困難な医行為・症候 (AED、小児救急等) や段階的トレーニングが必要な医行為 (注射、超音波検査等) に関してのシミュレーションが計画的かつ効率よく実施できるように管理・準備・指導を担当する。

## ③教育支援者の配置1名

学生の到達度に応じて医行為を経験させるため、医師を教育支援者として雇用し、病棟・診察室において指導医の補助を行う。カルテ記載の指導や学生自らへの実習協力に関する同意書取得の同席も含む。

<p><b>②達成目標・評価指標</b></p> <p>(達成目標)</p> <p>教育提携医療機関の充実、指導医制度の創設、連絡協議会の開催等、診療参加型臨床実習の充実を図ってきたが、一層の強化と本事業の取り組みを通して主な症候と医行為を安全にかつ確実に経験し、卒業時に必要なEPAを達成することを目標とする。地域全体・多職種連携で学生医を育てる文化を醸成し、地域に求められる医療体制を強化する。</p> <p>(アウトプットと評価指標)</p> <p>(必須指標：◆、任意指標：◇)</p> <p>◆診療参加型臨床実習の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協力医療機関の増加 金沢医科大学と連携【実績】令和5年度42 【目標】令和8年度50 令和11年度60</li> <li>・教育支援者による教育提携医療機関訪問(5回/月)、連絡協議会参加施設 100%</li> </ul> <p>◇多職種連携教育の充実:多職種連携演習(1シリーズ/5年次)</p> <p>◇多職種連携カンファレンスへの学生の参加(1回/月)</p> <p>◇POCUS実習の充実:開催数(2回/月)、参加数 200%増</p> <p>◇多職種連携小児救急シミュレーションの充実:開催数(2回/月)、参加数 200%増</p> <p>(アウトカムと評価指標)</p> <p>(必須指標：◆、任意指標：◇)</p> <p>◆門田レポートで実施すべきとされている医行為のうち、医学部生が実施する医行為数、医行為の経験率</p> <p>【実績】令和4年度:14(28%) 【目標】令和8年度:35(70%) 令和11年度:50(100%)</p> <p>◇臨床推論に基づいた医療面接、身体診察の症候別経験率:主な経験すべき症候</p> <p>【実績】経験率が低い症候(令和5年度実績25%未満)・脱水、血痰・喀血、吐血、ショック【目標】100%</p> <p>◇シミュレーターで代替可能もしくは準備すべき医行為</p> <p>【実績】実施率が低い医行為(令和4年度卒業生実績25%未満) 静脈注射、AED、妊娠反応、ネブライザー</p> <p>【目標】100%</p>
---

## 2. 拠点大学としての役割・事業成果の普及

### (1) 臨床研究について、他の大学や研究者、企業等の事業機関をけん引する方法

<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携校の金沢医科大学はもとより、金沢学術アカデミーの広報活動を充実させ、他大学への横展開を行う。</li> <li>・金沢大学は、Web サイトを通じ日本語と英語による情報発信を行っている。海外の学生に対しても、金沢大学外国人留学生サイトを充実させるとともに、英語版キャンパスライフガイドブックとして「Get Started」を発行し、留学生向けの生活情報や留学生の声を発信している。さらに、留学生の大学院生を増やすため、同サイトに留学希望者向けのページを作成し、各学域・各研究科や入試に関する情報へのアクセスを容易にしている。</li> <li>・本事業専用の web サイトを作成し、プログラムの内容に加え、参加学生の声をリアルタイムに伝える等、活動報告を充実させる。併せて、本事業の概要を紹介したパンフレットを作成し、広く配布する。本事業で金沢キャンパス内にとどまらず広く地域の大学・企業等に普及啓発する。</li> <li>・Web サイトを通じ最新情報についても広報活動を行い、国内外に広く本事業の取り組みを周知する。</li> </ul>
---

### (2) 医療情報等の研究データ等を共有する取組

<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究データは、本学の「金沢大学学術データマネジメントポリシー」の指針に沿い、機微な情報の取り扱いに配慮しつつ共同研究機関・企業等とのデータの共有・利活用を推進し、さらなる研究成果の創出に供する。</li> <li>・データ共有・公開は、本学が構築し試験運用中の研究データマネジメントシステムでの活用を検討する。</li> <li>・研究データの共有先・共同研究で新たな成果創出が得られた際は、本事業で生成された研究データに基づくものであることを成果公表時に明示を求めるなど、本事業による成果の評価向上に繋げる。</li> <li>・金沢大学附属病院の各診療科と共同研究を行う大学等の学術機関や企業と研究データを共有する仕組み(学術データマネジメントポリシー、DMP管理に係る規定等策定や情報分譲委員会整備等)を学内に構築中である。</li> <li>・さらに、本学における個々の医療臨床情報、コホート情報等を集約、さらなる精密な情報の充実を図り、学内研究者はもとより他大学研究者や企業等による活用も視野に入れた金沢大学バイオバンクの構築に向けて検討を進める。</li> </ul>
--

### (3) 事業成果の普及

<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業のホームページを整備し、事業内容を分かりやすく公開する。イベントや発表の機会があれば積極的に参加して公表していく。</li> <li>・キックオフシンポジウム1回、シンポジウム(2大学合同シンポジウム、事業採択校との合同シンポジウムなど)、市民講座(地域住民および小中高生対象)、研究発表会等において、事業の実施状況、人材モデルを発信する。</li> <li>・支援対象となる全研究科・専攻の長及び各大学院担当係を通じ、大学院学生の指導教員に周知する。</li> <li>・申請対象者(大学院入学者選抜合格者・出願者を含む)に対し、直にメッセージを通知する。</li> <li>・大学間国際交流協定校に配置する「コラボラティブ・プロフェッサー」による学生募集やダブル・ディグリープログラムを実施する連携する大学院からの推薦により本事業の趣旨に合う外国人留学生を獲得する。コラボラティブ・プロフェッサーは、海外高等教育機関等で教育職又は研究職に就く本学卒業・修了者等であり、本学との国際交流の推進を担う。現在35の国・地域に193名(ASEAN諸国+台湾は5か国・1地域の大学間国際交流協定校には計44名)が委嘱され、多様な国・地域の留学生の大学院生の確保が期待できる。</li> <li>・博士進学を見据えたキャリア形成を早期から意識付けさせることを目的に、博士前期・修士課程及び博士後期・博士課程すべての大学院学生募集要項に本事業の詳細を掲載するとともに、公募に先立つプロジェクト説明会を博士学位取得者による講演会と合同開催し、学生の博士進学を鼓舞する。</li> <li>・成果物は他大学でも利用できるよう公開する。</li> <li>・開発した教育資料やデジタルコンテンツ:学生への臨床研究指針の教育に用いるコンテンツなどの成果物は、他大学にも利用できるよう公開する。</li> </ul>
---

### 3. 医師の働き方改革への取組

金沢大学附属病院は医師の働き方改革を運営上の最重要目標の一つとして従来から積極的に取り組んでおり、令和4年度実績で時間外労働時間が960時間を超える医師の時間外労働時間を令和5年度から特例水準暫定期間（令和17年度末まで）が終了する2年前の令和15年度までの11年間で徐々に削減する計画とし、年間約9%の削減を目標値としている。目標実現に向け、病院長、副病院長、病院長補佐等7名による「医師の働き方改革検討WG」を設置し、月に一度開催する連絡会議で、課題の把握・改善方策の立案を行っている。令和5年度にはビーコン自動打刻型勤怠管理システムによる労働時間の一元的な管理体制の構築や、VR（仮想現実）臨床研修システムの導入による医学生・研修医への教育・指導に係る時間の約20%削減の成果を上げている。令和6年度には医師の長時間労働を是正しながら、教育研究へのエフォートを拡大できる体制を整備し、持続可能な運営を実現するための大学院改革プランを策定・公表・実行する。改革プランに内包される本事業では、学術アカデミーにおいて、大学院生等の若手研究者に対し、これまで各研究分野の指導医が個別に行っていた基礎的な実験技術や論文作成技術等、共通的な指導を一元化することにより、指導に係る時間を削減する。また、基礎的な技術を身に着けた学生が各研究分野でTA・RA等としてアカデミーの人材バンク部門において効率的にマッチングし、研究補助・教育補助を行うことや、トレーニング部門の専任教員や技術職員自身が研究分野からの実験受託等を請け負い、教員の研究時間・教育時間を確保する。この他、改革プランでは以下の取り組み等により診療業務・管理業務の削減に取り組む。

- ・ 医師業務の一部を他職種にタスクシフト/シェアを行うことにより、医師への業務の集中や負担を軽減し、労働時間短縮を行う。（具体的には、医師事務作業補助者の増員、特定行為研修修了看護師の養成や配置、会議時間の短縮徹底、研修やカンファレンス等のオンライン化等）
- ・ 勤怠管理システムにより労働時間の可視化や多角的な分析を行うとともに、医療DX等により業務の効率化等により適正な労働環境を整備する。

### 4. 事業の運営体制

金沢学術アカデミーの運営にあたって、金沢大学医薬保健学域・研究域の下に金沢学術アカデミーセンターを設置する。組織体制として、医薬保健研究域・医学系長がセンター長を担い、副センター長を2名（基礎研究分野担当、臨床研究分野担当）を置く。アカデミーの実働部門として「トレーニング部門」「人材バンク部門」「教材開発部門」の3つの部門を設置する。「トレーニング部門」ではアカデミー所属学生への指導を行い、専任教員2名、技術職員2名を配置する。「人材バンク部門」では人材バンク管理、TA・RA等のマッチング、広報等を行い、専任教員1名、事務職員2名を配置する。「教材開発部門」では教材・デジタルコンテンツ開発、カリキュラム作成等教育マネジメントを行い、事務職員1名、事務補佐員1名を配置する。各部門にはそれぞれ部門長を置き、さらに3部門総括的にマネジメントする部門統括長を置く。連携校である金沢医科大学においてはアカデミー金沢医科大学支部長を配置するとともにトレーニング部門における教員を雇用し、金沢医科大学、金沢大学双方で指導をできる体制とする。

さらに、トレーニング部門は附属病院の臨床研究支援部門である金沢大学先端医療開発センターや、全学的研究支援組織の先端科学・社会共創推進機構、実証研究を支援する未来知実証センターと連携し、研究分野における研究補助の受託業務も担う体制を整備する。

また、オール北陸で新産業創出や人材育成に取り組む産学官金プラットフォーム（地域連携プラットフォーム）である北陸未来共創フォーラムにおいて、北陸の他大学や企業等に対し、情報発信、連携ができる体制を構築している。

事業運営にあたっては、事業責任者である金沢大学附属病院長を委員長とした、金沢大学、金沢医科大学の事業推進プロジェクトリーダーなどの事業担当者、石川県健康福祉部、富山県厚生部など自治体、臨床実習先の医療機関の事業担当者を含んだ事業推進委員会を設置し、事業の推進・進捗管理・連携2大学の円滑な連携による事業推進を担う。

### 5. 事業の継続に関する計画

本事業によって開発する教育プログラム・コースは、令和10年度より各大学において一部自己負担による事業推進を開始する。本事業では学長運営会議の設置により連携大学の学長の密接な連携を図っており、事業終了後も両大学の学長のガバナンスのもと、運営予算を確保し事業を継続する。自治体との連携のもと、地域のニーズを把握し、また、地域医療の安定化と高度化、地域枠人材の確保と地域への確実な定着に取り組む本プログラムの内容は、地方創生、地方活性化においても需要が高く、人材養成・教育モデルとして広く発展する可能性が高い。そこで、事業終了後も、各省庁、自治体の公募事業などへの申請も含め、運営予算を確保し継続する。また、本事業では、地域枠入試、研究マインドを備えた臨床医育成など、高大接続や大学院接続についても積極的に取り組んでいる。

これらの取り組みにより、本教育プログラム・コース教材は生涯の学びの場として需要が事業終了後も継続すると考えられ、事業期間終了後である令和12年度以降も、履修生の受け入れ、各種委員会、内部・外部評価を維持し、発展的な継続を行う。

## 6. 年度別の計画

令和6年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 7月 学術アカデミー準備委員会設置</li> <li>② 7月～ 学術アカデミーのための教職員の採用</li> <li>③ 10月 学術アカデミーの公式ホームページの公開</li> <li>④ 10月 学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの作成</li> <li>⑤ 10月 学術アカデミー教育カリキュラム、オンライン教材の作成</li> <li>⑥ 10月 学術アカデミーの学内学生向け説明会の開催</li> <li>⑦ 10月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>⑧ 10月～ 学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全5回）</li> <li>⑨ 11月 人材バンクの制度設計と登録開始</li> <li>⑩ 11月～ 学術アカデミーでのトレーニング</li> <li>⑪ 12月 学術アカデミーの紹介のためのキックオフ・シンポジウムの実施</li> <li>⑫ 3月 年次報告書作成</li> </ul>
令和7年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 4月 学術アカデミーの4月入学生向け説明会の開催</li> <li>② 4月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>③ 4月～ 学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全10回）</li> <li>④ 5月～ 学術アカデミーでのトレーニング</li> <li>⑤ 10月 学術アカデミーの10月入学生向け説明会の開催</li> <li>⑥ 10月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>⑦ 11月 学術アカデミーマッチング調査</li> <li>⑧ 11月 医師の働き方改革に与える影響及び受け入れ教員向け意向調査</li> <li>⑨ 1月 定期シンポジウム</li> <li>⑩ 3月 年次報告書作成</li> <li>⑪ 4、9月 人材バンク登録</li> <li>⑫年間 学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの更新</li> <li>⑬年間 学術アカデミー教育カリキュラム・オンライン教材の更新</li> <li>⑭年間 公式ホームページ更新</li> </ul>
令和8年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 4月 学術アカデミーの4月入学生向け説明会の開催</li> <li>② 4月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>③ 4月～ 学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全10回）</li> <li>④ 5月～ 学術アカデミーでのトレーニング</li> <li>⑤ 10月 学術アカデミーの10月入学生向け説明会の開催</li> <li>⑥ 10月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>⑦ 11月 学術アカデミーマッチング調査</li> <li>⑧ 11月 医師の働き方改革に与える影響及び受け入れ教員向け意向調査</li> <li>⑨ 1月 定期シンポジウム</li> <li>⑩ 3月 年次報告書・中間報告書作成、自走化に向けた精査</li> <li>⑪ 3月 年次報告書作成</li> <li>⑫ 4、9月 人材バンク登録</li> <li>⑬年間 学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの更新</li> <li>⑭年間 学術アカデミー教育カリキュラム・オンライン教材の更新</li> <li>⑮年間 公式ホームページ更新</li> </ul>
令和9年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 4月 学術アカデミーの4月入学生向け説明会の開催</li> <li>② 4月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>③ 4月～ 学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全10回）</li> <li>④ 5月～ 学術アカデミーでのトレーニング</li> <li>⑤ 10月 学術アカデミーの10月入学生向け説明会の開催</li> <li>⑥ 10月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>⑦ 11月 学術アカデミーマッチング調査</li> <li>⑧ 11月 医師の働き方改革に与える影響及び受け入れ教員向け意向調査</li> <li>⑨ 1月 定期シンポジウム</li> <li>⑩ 3月 年次報告書作成、自走化に向けた事業内容の更新計画の作成</li> <li>⑪ 4、9月 人材バンク登録</li> <li>⑫年間 学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの更新</li> <li>⑬年間 学術アカデミー教育カリキュラム・オンライン教材の更新</li> <li>⑭年間 公式ホームページ更新</li> </ul>
令和10年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 4月 学術アカデミーの4月入学生向け説明会の開催</li> <li>② 4月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>③ 4月～ 学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全10回）</li> <li>④ 5月～ 学術アカデミーでのトレーニング</li> <li>⑤ 10月 学術アカデミーの10月入学生向け説明会の開催</li> <li>⑥ 10月 学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催</li> <li>⑦ 11月 学術アカデミーマッチング調査</li> <li>⑧ 11月 医師の働き方改革に与える影響及び受け入れ教員向け意向調査</li> <li>⑨ 1月 定期シンポジウム</li> <li>⑩ 3月 年次報告書作成、自走化に向けた事業内容の更新計画の実施</li> <li>⑪ 4、9月 人材バンク登録</li> <li>⑫年間 学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの更新</li> <li>⑬年間 学術アカデミー教育カリキュラム・オンライン教材の更新</li> <li>⑭年間 公式ホームページ更新</li> </ul>

令和11年度	① 4月	学術アカデミーの4月入学生向け説明会の開催
	② 4月	学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催
	③ 4月～	学術アカデミー研究技術トレーニング部門の外部講師によるセミナー（全10回）
	④ 5月～	学術アカデミーでのトレーニング
	⑤ 10月	学術アカデミーの10月入学生向け説明会の開催
	⑥ 10月	学術アカデミーの連携校学生向け説明会の開催
	⑦ 11月	学術アカデミーマッチング調査
	⑧ 11月	医師の働き方改革に与える影響及び受け入れ教員向け意向調査
	⑨ 1月	定期シンポジウム
	⑩ 3月	最終報告書作成
	⑪ 4、9月	人材バンク登録
	⑫ 年間	学術アカデミー研究技術トレーニングカリキュラムの更新
	⑬ 年間	学術アカデミー教育カリキュラム・オンライン教材の更新
	⑭ 年間	公式ホームページ更新